



継続とカイゼンそして成長 ～地域コミュニティと共に～



松戸市立小金北中学校長 あゆかわ 鮎川 わたる 渉

1 はじめに

何でこんなにしゃべれなくなってしまったのだろう。今まで、生徒の前で話をするとき、原稿など書かなかつたし、保護者会の時など書いても読まずに話をしていたのに…。

全校生徒の前で、校長として話をしようとする、「間違っことは話せない。」と思うと原稿を書き、何度も書き直す。いざ話すときは「読んで伝わらない。」とわかっていながらも間違えないように原稿を見ながらの話になってしまう。今までも無責任に話をしてきたつもりはないが、校長としての責任の重さ、プレッシャーがこんな風に表れるとは思ってもいなかった。そんな戸惑いを持ちながらも、自分なりに推進してきた学校経営を振り返ってみたい。

2 継続とカイゼン

(1)継続とカイゼンの意味

本市教育長から、「校長がかわれば学校が変わるという言葉があるが、校長がかわった、交代したからといって、学校が変わってはいけない、不安定になってしまう。前年度の引き継ぎをベースに微調整し、順を追って進めていかなければいけない。自分はこれが得意だから、好きだからといってそれを中心にやるんだ。というのは思い上がりだ。」というお話をうかがった。

この言葉を踏まえ、校長就任当初、学校

経営の重点は「踏襲と改革」「継続とカイゼン」としていた。しかし、年度途中で、先輩校長から「引き継ぐのは理念。中身は自分で決めなければいけない。またカイゼンだけでなく、成長戦略を」というお話をいただき、「継続とカイゼンそして成長」を念頭に学校経営に取り組んだ。

(2)本校の特徴

ここであらためて本校の特徴を紹介させていただく。本校は、松戸市の北西部に位置し、坂川を境として流山市と隣接した幸田丘陵を望む水田穀倉地帯に平成2年に松戸市21番目の中学校として開校した。松戸市の中では新しい中学校である。歴史が浅いながらも、創立当初から続いている主な2点を紹介させていただく。

①小金北中八か条

小金北中八か条

- 第一条 さわやかな挨拶をしよう。
- 第二条 さわやかで節度ある身だしなみにしよう。
- 第三条 自ら時間を守り、能率的・効率的に使おう。
- 第四条 安全に気をつけ、節度ある生活をしよう。
- 第五条 昼食の時間を通して、仲間とのふれあいを深めよう。
- 第六条 みんなで使うものや施設を大切にしよう。
- 第七条 勤労と奉仕の心を持ち、常に学校の美化に努めよう。
- 第八条 誰とでも仲良く活動し、お互いに高め合おう。

本校には開校以来、校則は制定されていない。それに代わって、小金北中八か条という約束が創立当時の生徒会を中心に作られ、それを、上級生から受け継ぎ、生徒たちは大切にしてくれている。職員も、いつもこの八か条に照らして生徒たちに自身の生活を見つめ直すよう指導・支援している。

②地域との協働・連携について

本校には、「小金北中学区教育コミュニティ会議」という組織がある。この組織は発足当時全国的に発生した「いじめによる自殺」に対する危機感を強く持った学校と保護者代表が中心となって、学校・家庭・地域の連携組織として1995年3月に立ち上げたものである。

この活動の大きな特徴は、三者の「協働」にある。それまで、学校・家庭・地域の役割分担を明確にするべきであるということが言われていたが、「分担」を強調することにより他方の責任を追及したり、自らの責任を回避するなどの傾向も見られた。そこでこの組織では、三者が協力して、同じ事業を行うことを通して相互理解を深め互いに補い合う協力関係を築くことを目指して以下のような活動をしている。

(ア) 世代交流会

(イ) ボランティア体験学習

(ウ) 子育てふれあい教室

(エ) 教育相談

(オ) 学習支援

→詳細については本校 WEB ページを

(3)継続するものこそカイゼンする

継続するもの、カイゼンするもの色々ある。前記の①と②は既に簡単に無くすことができない、つまり継続していくものである。しかし、継続すべきものだからこそ、現状を的確に把握・分析をし、カイゼンし

ていくことが大切であるとあらためて感じた。

たとえば①の八か条を例にとると、実際には理念だけでは指導がしづらいということで職員用に生徒指導マニュアルが作成されていた。時代と共に中身は見直されてきたが、知らぬうちに管理的、対症療法的なものになっていた。確かに指導の線引きがあれば指導はやりやすいが、八か条に返して生徒に考えさせ、成長させるという理念から遠ざかってしまっていたのである。1年かけて生徒指導部会で検討を進め、原点に戻りつつも現状にあったマニュアルに作り直したところである。

3 おわりに

これからの本校の成長にとって、地域コミュニティとの協働・連携は一層欠かせないものとなっていく。学校・家庭・地域は、人と人との出会いを通し、より良い生き方を学ぶ大切な教育の場であるとともに、学んだことを実践する場でもある。その特性と役割を大切にしながら、三者が一体となった組織的な活動を展開することは、人間の成長・発達にとって大きな影響を与える。家庭及び地域社会で育ち、これからも地域社会で生きていく子どもたちの健全な成長・発達を考える時、学校を核に家庭と地域が協働・連携して「ともに子育て」という意識を共有し、地域コミュニティづくりに努める事はたいへんに意義のあることである。今後もそれぞれがもつ役割を担いつつ、地域を愛し、地域社会の将来を担う子どもたちの「生きる力」「思いやりの心」を育むことができるよう、また、長く継続できるよう、現状把握と分析をしっかりと行った上で、実践を工夫改善し、成長へとつなげていきたい。

学校を
支える

「チーム生浜」の取組



あおやぎ よしかね
青柳 表錦
県立生浜高等学校教頭

1 はじめに

本校は全日制と三部制の定時制を併置している。創立は昭和53年だが、平成19年に三部制の定時制が併置され、10年目を迎える。全日制と三部制の定時制を併置している高等学校は県内唯一であり、全国的にもあまり例がない。

現在、全日制は各年次2学級の計6学級。三部制の定時制も各年次2学級の計24学級。三部制の定時制は、午前部・午後部・夜間部の3部でそれぞれ登校時間が違う。

職員は、全日制と定時制の職員及び非常勤講師を合わせると100名を超える。勤務時間は、全日制と午前・午後部が午前8時25分から午後4時55分、夜間部が午後0時45分から午後9時15分である。一つの学校の中で、複数の生活パターンがある複雑な学校である。全日制の教頭として、また高校に赴任して2年目だが、本校の取組を紹介したい。

2 各課程の特徴

(1) 全日制の課程

全日制は、「一步前に踏み出せる学校」を合い言葉にしている。

中学校ではクラスや部活動などで目立った存在ではなかった生徒でも、それぞれに得意な場面で自分らしさを表現できる場があるのが全日制の特徴である。

全日制は各年次2学級ずつしかない。従って全日制の全職員がほぼ全生徒の授業を担当している。しかもほとんどの授業が

少人数、習熟度別に展開されるため、生徒一人一人に合わせた丁寧な指導がなされている。

さらに1年次から3年次の全生徒を対象に学び直しのトレーニングとしてベネッセの「マナトレ」を帰りのSHRの前に実施している。

本校では、授業が2コマ連続の90分授業（全定共通）なので、先生方は、基本的事項の確認やペアワークなどを取り入れた演習など様々なアプローチを試みて、授業を展開している。

また、生徒一人一人との距離が近いので、職員室にいると気になる生徒や頑張っている生徒の様子が先生方の会話から良く伝わってくる。特に気になる生徒がいれば、担任一人に任せるのではなく、全日制職員それぞれの立場で対応できるよう情報の共有化を図っている。場合によっては、スクールカウンセラーを交えケース会議を開くなど、生徒一人一人への対応を丁寧に行っている。

(2) 定時制の課程

三部制の定時制は、他部の履修等により、3年間での卒業が可能で、自分のペースで時間を有効活用できるように一人一人の日課が組まれている。特に、午後部・夜間部は通学の時間に余裕がある。

少人数編成の授業は、基本的事項の学び直しから、専門的な内容まで豊富な科目が設定されている。近年、外国をルーツとする生徒が増加傾向にあるため、日本語を母

語としない生徒へのサポートプログラムや中学時代に不登校を経験している生徒への不登校回復プログラムなどを立ち上げるなど本校に入学してくる生徒のニーズに合わせた取組を行っている。

3 全定一体の取組

本校では以上のような二つの課程が一体となった学校づくりを行っている。

例えば、部活動の中心は全日制や午前部の生徒だが、顧問は全定の職員が一緒になって指導を行っている。

「中学ではずっと控え選手だった」とか「県大会には出場経験がない」という生徒が少なくないが、生徒の活躍の場であると同時に心身の成長の場ととらえ技能向上はもちろん心の成長にも重点を置いた指導が行われている。最近はその頑張りが形となって表れ、県大会へコマを進める部活動も多くなってきている。

また、公開3年目となる「しほた祭（文化祭）」は、全校が一つのテーマのもとで活動し、全定それぞれの学級が同じ時間帯に発表する形をとっている。他にも年度初めの遠足や修学旅行は、年次ごとに全定が同じ日程で行い、横のつながりを大切にしている。

それぞれの課程での考え方や取組方は違う面もあるが、教職員が丸となって「チーム生浜」を形成し、教育活動にあたっている。

4 保護者や地域とのつながり

(1)生浜Now

本校ではホームページを1日に2回更新している。一度目は朝（登校前）で、本日の予定を掲載、二度目はその日の出来事やトピックスを夕方に更新している。1日2回の更新はたいへんだが、「登校できなかった生徒に学校の様子を伝えたい。」「保護者

の方が学校で何をしているのか知ってほしい。」という担当職員の熱い思いがあるからこそできていることである。

(2)地域との交流

保育園と合同の防災訓練、通学路清掃、敬老会等の地域行事への参加、花植えの活動や異校種交流などを行っている。地域の方々との会話の中で、改めて学校への期待が大きいことが分かる。学校と地域のパイプ役として地域の行事には生徒を含めて積極的に参加している。

5 支えられて

先にあげたホームページの更新も様々なプログラムも、本校生徒の頑張りを少しでも支援していきたいと願う多くの職員によって成り立っている。

教頭として果たすべき役割は、先生方からの提案や思いを実現させるために調整を図っていくことであり、さらに今何が必要かを示し、進む方向をはっきりとさせていくことである。しかし、教務関係のこと、生徒指導に関することなど様々な場面で、それぞれの担当職員に支えながら毎日過ごしているのが現状である。

そこで、教頭としてできることは、日頃から先生方とのコミュニケーションを大切にすることである。できるだけ準備室等に行き、直接話を聞く。常にアンテナを高くして生徒や職員に関する情報を得ることである。

本校には、校長だけでなく、定時制には副校長と教頭がいる。信頼し、相談できる先輩管理職がいることはとても心強い。今後もネットワーク・フットワークそしてチームワークの3つのワークを大切に「チーム生浜」がより一層結束できるよう努力していきたい。



教務主任の役割とは

～理解し、^{つな}繋ぎ、引き出す～



山武郡横芝光町立日吉小学校教諭 ^{もりや}守屋 ^{あつし}敦

1 はじめに

最初に「千葉教育」の原稿依頼を受けたとき、今までの取組を整理し、自分自身の職務に対する姿勢を再点検する良い機会だと感じた。ここでは、教務主任として普段私が意識して取り組んでいることが、結果、学校の変化や成長の一助になっているのではないかと考えることを紹介させていただく。

2 職員室という学級

教師として教壇に立つとき、その立場は多くの場合学級担任である。私自身も現在は、過小規模校勤務のため、教務主任と兼任という形であるが、一学級担任である。教務主任を務めるようになった今、強く感じることは、「職員室も一つの学級」ということだ。校長が学級担任であり、教務主任は担任の考えをクラスメイトに浸透させる級長である。

私は、教務主任として、以下の3つのことを大切にしている。

(1)校長の意図を理解する

学校が目指すものは何か。それは、学校教育目標を達成することである。学校で何かを始める場合、教務主任はその多くの取組の発起人となる。私は、日々、校長がどのような学校像の実現を描いているのかを考えている。それは、校長との会話の中で直接言われることもあるし、発する言葉や行動の端々から感じることもある。それを職員の活動として具現化し、自分が率先垂範し動くことで、先生方の協力を得ている。なぜなら、行動には最高の説得力があるからだ。学校は一人では動かせない。周りの先生方に身をもって示し、協力を得ることは必要不可欠である。

(2)教頭との連携

本校は、田園地帯にあるのどかな学校だ。全校児童65名で児童同士の仲が良く、まるで全員が兄弟のようである。さらに、学校と地域との垣根も低く、保護者は温かく学校に対してたいへん協力的だ。その地域との窓口は、教頭である。私は、職員全員が協力して得た地域や保護者の学校に対する願いや期待、時には要望や不満といった情報を大切にしている。それを毎日の教頭との会話から得て、解決策を具現化している。本校のような地域に密接した過小規模校では、たいへん重要なポイントである。

(3)力を引き出す

「指導力」とは何か。私は、その人の持っている力を引き出す力だと考える。先に述べたとおり、本校は児童数が少ないため、それに比例して職員数も少ない。つまり、職員個々の力をいかに引き出すかが重要である。そのために私は、毎日全員の先生方と会話をし、その人となりを理解しようと努めている。そして、先生方の優れている面は、みんなの前で伝わりやすく賞賛している。プラスの投げかけは、その人の持つ力を最大限に引き出すからだ。これは、職員も子どもたちも同じである。学校は組織で動いている。一人一人の力量を高めれば、最高の組織となる。

3 おわりに

今回、このような機会をいただいて、改めて自分自身の教育観・指導観を振り返ることができた。実際にはうまくいかないこともあるが、今後も子どもたちが毎日笑顔で過ごす、活気のある学校づくりに邁進していきたい。



企業派遣研修を学校現場で生かす

～ウェザーニューズ社での研修から学ぶ～



千葉県立千葉高等学校教頭 いちかわ 市川 とおる 透

1 はじめに

ベテラン教員の高齢化、若手教員の大量採用により学校が大きく変化している。ベテラン教員の意識改革や若手教員の指導力の向上など、全職員が組織的に取り組むことが必要とされている。また、学力向上や外国語教育の充実、その評価方法などの多くの課題がある。

今回の研修において、5年後、10年後の学校現場の職員構成と同じようなウェザーニューズ社において、「企業の組織マネジメント、若手人材の育成や企業戦略としてのグローバル展開」を学び、学校現場に生かしたいと考えた。

2 ウェザーニューズ社の研修で得たこと

ウェザーニューズ社は、創業以来「イニシアチブ、相互信頼、共同体の一員としての自己認識」の3つの文化を大切に継承しながら、更に進化している。海外との取引も多く、国際色豊かな人材を確保している。若い社員も多く、活気あふれる企業である。

私は、4か月間勤務し、主に総務部の配属で、秋の採用試験、新入社員研修などの補助、気象センターでのモニタリングなど様々な業務を経験することができた。

(1)戦略的方針決定と情報の共有化

顧客ニーズの高度化・多様化等に対応したフラット型組織となっており、トップと社員一人一人、あるいは現場とのコミュニケーションが取りやすい体制である。新たな企業戦略の企画、運営が短期のうちに実行できる社内システムである。また、不定期であるが他部署への異動があり、複数の部署を経験し、会社の業務を多方面から見る体制をとっている。月曜日の午前、テレビ会議システム、通訳を通して、国内拠点、海外拠点を含めて、全社員に情報の共有化をしている。また、新しい情報は直ぐにイントラにあげ、社員が直ぐに情報を確

認し、対応できるようになっている。

(2)自主的な研修、個に応じた研修

全体研修の内容の一部を、新入社員自ら計画し実施している。また、一人の新入社員に対して、担当者の他に多くの社員が新入社員の情報を共有して見守っている。また、将来の管理職候補者の育成も経営陣の主導のもと実施され、仕事に対する考え方、責任感等についてリーダーとしての見識をもたせながら研修を実施している。

3 企業研修を学校現場で生かす

(1)職員間の情報共有と迅速な対応

学校組織も担任や部顧問を通して生徒、保護者や地域の意見を集約し、ニーズに対応できる組織づくりを更に進める必要がある。校務分掌においてもいくつかの分掌を経験し、多方面から教育活動を見る目を養い、各分掌の枠にとらわれず、互いが情報を共有しながら生徒の教育に素早く対応できる体制作りを進めていきたい。

(2)若手人材育成について

主体的な研修、多くの教諭による多面的な研修などを、より積極的に進めていくことが必要だと考える。経験者研修においては数年後のリーダーとしての認識を持たせスキルアップのできる環境を作っていきたい。

4 おわりに

企業派遣研修を通し一番感じたことは“人”を大切にするということである。社員の職場環境の保障はもとより、しっかりとした若手への対応、non-Japaneseの社員への細やかな支援などがある。学校現場もベテラン教員世代の親の介護や若手世代の子育てなど、今後、更なる職場環境の変化への対応をしっかりとしていきたい。

最後に、このような貴重な研修の機会を得ることできたことに心から感謝致します。

授業を
創る

基本にもどって



千葉県立小中台中学校教諭 さわだ 澤田 けんすけ 健介

1 はじめに

社会科において、良い授業とは何だろう。「貿易摩擦ゲーム」や「模擬裁判」など子どもたちが実感をともなって学ぶ授業を考え、授業づくりをしてきた。グループ活動や資料から考える活動を多く取り入れることで子どもたちが、主体的に学習に取り組む姿が見られ意欲の向上を図ることができた。しかし、学習のまとめでは、「楽しかった」「次は勝ちたい」など授業の目標に対するまとめではなく、活動内容など、教材に関する内容が多く見られた。公民的資質の基礎を養うための教科として、子どもたちの意欲を高める教材を考えるだけでは、良い授業にはならない。グローバル化やIT革命、公職選挙法の改定など、目まぐるしく変化していく時代の中で、どのような授業をつくっていったらよいのだろう。そんな思いを持ちながら、授業を改善するべく、昨年3回の研究授業に取り組んだ。私の目標は「良い授業をつくる」である。

〔目指す良い授業象〕

- ・ 学ぶべき事をしっかりと学ぶことができる
- ・ 子どもたちが実感をともなって学ぶ

2 授業づくり

良い授業をつくる時に大切なことは、何だろう。今まで授業づくりをする時は「教科書を教えるのではなく教科書で教える」この言葉の意味もしっかり理解しないまま、子どもの興味を引きつける内容、教材の面白さ、結果の意外性などに着目して、教材を主体とした授業づくりをしてきた。その結果、教材づくりに関しては、いろいろなことを学ぶことができたが、授業とし

ては、良い内容とは言えなかった。学ばせるべきものを、学ばせることができない授業になってしまっていた。そこで、授業づくりの順序を見直し、図1のように基本に戻って考え、進めることにした。

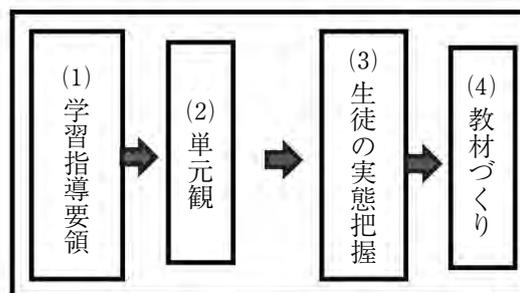


図1 授業づくりの順序

(1)学習指導要領を読み込む

第一に取り組んだことは、学習指導要領にしっかりと目を通し、その単元の目標や内容の取り扱い、本時の目標をしっかりと考えた。このことで、学ばせるべきことがはっきりとし、授業のゴールを明確にイメージすることができるようになった。これは、今までに無い感覚で、良い授業づくりの手応えを感じた。

(2)単元観を深める

次に、単元観を深めることに取り組んだ。今までは教材主体だったので、本時とその前後を結び付ける事ができていれば良いと考えていた。その結果、つじつま合わせのような授業になっていた。単元観を深めていくと本時だけを考えるのではなく、全ての時間のつながりを考えることができ、単元を貫く授業構成を作ることができるようになった。

(3)生徒の実態把握

生徒の実態把握では、興味関心や既習・

未習事項の確認の他、現代の社会事象や学習形態など、授業構想を念頭に細かく調査し、学級並びに個人の実態をしっかりと把握するようにした。それにより、授業形態や個に応じた指導をしっかりと考えることができた。

(4)教材をつくる

以上の事を基にしながら、生徒の実態に合わせて教材を考えることで、教材づくりにも今まで以上に意味を感じるようになった。生徒の興味関心を高めるだけでなく、その教材を使うことで、単元の目標を達成することができるかどうか。学ぶべき事がしっかりと学べるだろうか。そして、これからの時代を生き抜く力を身に付ける事ができるだろうかということを考えながら、学習課題を考え、教材づくりに取り組んだ。

授業づくりの順序を見直すことで、今までの教材づくりでは、感じられなかった様々なことを感じる事ができた。「良い授業をつくる」という目標の達成に向けて進んでいることを実感した。

3 授業実践

ここで、研究授業のまとめとなった、千葉市社会科主任会で展開した授業実践を紹介する。

単元名 公民的分野 「地方の政治と自治」

(1)学習指導要領から

この単元では、地方自治の基本は住民自治にあることを理解させることと、議会制民主主義の意義について考えることがねらいとなることを指導要領から読み取った。

(2)単元観

学習指導要領のねらいを受けて、地方自治を取り巻く現代の様子と生徒たちに身に付けさせたい事について以下のように考えた。

○現代の様子について

(ア)公職選挙法による18歳の選挙権

(イ)まち・ひと・しごと創生法の制定

(ア)からは、参画の意識を身に付けることが大切だと考える。(イ)からは、地方自治が担う役割が多くなっていることを知り、その中で住民の1人として地域作りに積極

的に関わろうとする態度を養いたいと考えた。

(3)生徒の実態と教材

本学級の全員が社会科を「好き」と答えている。

理由は、生活に身近だからという意見が多かった。このことから、本単元の教材を生徒に一番身近な学校に着目して考えようと思った。

また、千葉市に着目して単元を貫く構成を考え取り組んだ。

千葉市の教育に関する三つの政策の優先順位について資料を基に少人数グループで話し合いながら、論理的に決めて行くという教材を考えた。単元を貫いたことで、市の政策に対する議論や千葉市の予算など幅広い視点で考えられるようにすることで、単元の目標により迫れるのではないかと考えた。

(4)まとめ

授業を終えた生徒たちのまとめは、「千葉市の政治にもっと興味を持って生活したい」や「積極的に自治に参加したい」など自治への関心、参画意識の高まりを感じるものだった。

4 おわりに

授業づくりの順序という基本から振り返り、つくり上げた授業は、生徒が実感をともなって、学ぶべきことを学ぶことのできる良い授業になった。

昨年の授業研究から「面白い」＝「良い」ではないと実感した。本研究で学んだことを、若い先生方に伝えたいと強く思った。子どもたちのことを一番に考え、面白さだけを考えると、本質を見失ってしまう。授業づくりの基本をしっかりと押さえることで、良い授業になっていくと思う。また、多くの先輩から御指導、御助言をいただきながら授業を振り返る機会をもつことは、とても大切なことだと実感した。これからは生徒のために、そして自分自身の成長のためにともに育つ「共育」を目指してこれからも努力したいと思う。

子どもを知る

すべては子どもたちのために

～私の目指す教師～



袖ヶ浦市立根形中学校教諭 おのでらしおり
小野寺 汐莉

昨年度、本校に赴任し中学1年生の担任となった。子どもたちと一緒に笑い、悩み、時には涙した。教師はこんなに楽しいものか。と日々充実した毎日を送ることができた。そんな私も2年目となり、一年間共に過ごした1年生と一緒に2年生になった。右も左もわからない1年生とは違い、先輩という立場や中堅学年、ひいては根形中学校を引っ張る存在になる2年生の子どもたちは、入学した頃よりもとても大きく成長した。「今年の2年生はすごかったんだなあ」「3年生に負けないように頑張ろう」。日々、自分を見つめ直し、くじけそうになる心を必死に支え、ささいなことにも真剣に考えて行動する子どもたちを見ていると、こちらまで勇気がわいて、頑張ろうと自身を鼓舞することができる。

中学生は、大人と子ども両方の精神が混在する。悩まない日は無く、いつも自己嫌悪をしている。周囲に気付かれないように我慢をして、家でひっそりと泣いている子もいる。私は、そんな子どもたちに寄り添った教師でありたいと思う。悩みを話すだけで心が晴れるのなら、その一人のために時間を使う。保護者とうまく折り合いがつかないのなら、保護者を交えて一緒に解決策を考える。暗い顔をしていたら、明るい声掛けをして他愛ない話をする。こちらが少し気にかけて行動するだけで、子どもたちの観る景色は一変する。

「すべては子どもたちのために」一人一人に寄り添える、そんな教師をこれからも目指したい。

子どもを知る

生徒の成長と自分の成長



県立八街高等学校教諭 たかなし ともや
高梨 智也

私は現在高校3年生の担任をしています。生徒たちにとってこれからの人生を決める最も大切な1年間であると考えています。そのため学級経営にしても、教科指導にしても、部活動にしても、全力で生徒たちの気持ちに向き合っていこうと思っています。教員として教壇に立つにあたって、私が一番意識していることは、生徒は今どんな気持ちで、どんな思いで行動しているか把握することです。生徒理解をした上で、指導に当たることによって少しでも生徒の成長につながればと思っています。

夏休みが明けてからは、就職試験や進学に向けての進路指導で生徒とかかわる時間を多く取ることができました。その指導の中で、生徒一人ひとりの考えを知ることができ、より深い信頼関係を築くことができました。その影響か、教材研究等で帰宅が遅くなる日が続いていた私に対して、「先生、今日も一日頑張ろうね。」とクラスの生徒が声をかけてくれるようになりました。生徒に心配をかけさせてしまっただけで教師として失格だと感じながらも、生徒からの優しさを感じることができ、「これではいけない。」「もっと頑張ろう。」と思うことができました。そんな生徒たちと共に学校生活を送ることができるのも、あと数か月となってしまいました。まだまだ、教師として伝えなければならないこともあります。卒業式では笑顔で生徒たちを送り出していきたいです。